
お見舞い

yumesato

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お見舞い

【Nコード】

N9860N

【作者名】

yumesato

【あらすじ】

季節は梅雨。明久は幼なじみの春香の家にお見舞いに行く。

「きりーっ、れいっ！」

「お疲れ様でしたー」

帰りのホームルームが終わり、生徒達は足早々と教室を去っていく。

坂本が教室を出ようとしたところで、担任に呼び止められる。

「坂本、ちよつといいか」

「はい、なんでしょう先生？」

坂本は、ちよつと緊張しながら先生の方を見る。

俺なんか悪い事したっけ？そう考えながら。

「いや、たいしたようじゃないんだ。今日修学旅行についてのプリントを配っただろう。そのプリントを柳^{やなぎ} 春香^{はるか}に届けてやってくれないか？」

「え、俺がですか……？」

「ああ、お前クラス委員長だし、確か家も近かっただろう？」

柳 春香は、幼なじみであり小学校の頃からずっと同じクラスだ。

彼女は元々病弱らしく、普段から学校を休むことが多かった。

それでも今までは何とか進級はできていたが、今年になってからは症状が悪化してもうすでに一ヶ月間登校していなかった。

「いいですよ」

「良かった、助かるよ。ありがとう」

そついうと先生は、修学旅行のプリントを僕に渡す。

「じゃあ、忘れずに届けてくれよ」

「忘れませんよ、先生。では、失礼します」

先生に軽くお辞儀をした後、教室を出る。

廊下から外を見ると雨がしとしとと降っている。

梅雨のせいかここ1週間は雨がずっと降りっぱなしだ。

（春香、ずっと休んでいるけど大丈夫なのかな……）

帰る途中、坂本は途中駅前のフラワーショップへ行くことにした。彼女のお見舞いも一緒にしたかった彼は手ぶらでは心許ないので、お見舞い用の花を買うことにしたのだ。

しかし、花屋について坂本は少し困ってしまう。

「お見舞いってどんな花を買えばいいんだろう……」

今までお見舞などしたことなかった坂本は、花屋の前で立ち往生してしまった。

そんな様子を見ていた店員の女性は、彼に話しかけた。

「いらつしやい。どんな花を探しているの？」

「えっと、お見舞い用の花を……」

「あら、そつなの。それなら……」

そついうと、彼女は一本の花を差し出した。

それは薄紫色の紫陽花^{あじさい}。

そついえば、紫陽花の花言葉は「元気な女性」

たまたま妹が見ていた花言葉の本に、そんなことが書かれていたのを思い出した。

「じゃあ、これをお願いします」

そういうと、花屋の店員は紫陽花の花を丁寧に包装してくれた。

坂本はその花を受け取ると、代金を払い花屋を後にした。

「ここにくるのも結構久しぶりだな」

柳の家に着いた坂本は、早速チャイムを鳴らす。

チャイムを鳴らしてしばらくすると、母親が出てきた。

心なしか坂本には、柳の母親はどこかやつれているように見えた。

「あら、坂本君じゃないの、久しぶり」

「お久しぶりです」

「今日はどうしたの？」

「えっと、修学旅行のお知らせのプリントを渡してくれて先生に頼まれたんです」

そういうと、坂本はプリントを渡す。

「そうか、そういえばもうそんな時期なのね……」

そっいう彼女の顔に陰りが感じられた。

「ところで、その左手に持っている花は何？」

「えっと、これはお見舞い用の花です」

「あら、そうだったの！ありがとう。そうだ、直接渡してあげなさ

い。きっと彼女も喜んでくれるから」

「でも、病気は大丈夫なんですか？」

「今は小康状態を保ってるから大丈夫よ。それに、最近春香寂しがつていたみたいだし」

「そうですね、そういうことならおじゃまさせていただきます」

家に入り、階段を上がる。そして、母親はノックを鳴らす。

「春香、今大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

そついうと、母親はドアを開ける。

そして春香と俺が、互いに目を合わせると彼女はびっくりしたような表情をした。

「えっ、あ、明久君？^{あきひさ}どうしてここに？」

「彼、あなたが心配でお見舞いに来てくれたそうよ」

「えっ、お、叔母さんっ……！」

母親にからかわれつつも、坂本は春香の方へ行きそして花を渡す。それを受け取った彼女は、とても喜んでくれた。

「ありがとう、明久君」

「いいって、それより早く元気になれよ」

春香の母親は、花瓶を用意して、紫陽花を瓶の中に挿しそれを窓際に飾った。

それから母親はこれから用事があるのだと言い家を出て行ってしまった。

そして、春香の部屋には坂本と春香の二人だけが残された。

「……………」
「……………」

二人の空間にはただただ、沈黙があった。

坂本はこの状況を何と、彼女に話しかけようとしたとき、先に彼女から言葉が発せられた。

「あのね、私。修学旅行、行けないんだ」

「えっ……………！？ど、どうして」

「私、とても重い病にかかっているらしくて……………その病気を治すには手術と長い間入院しなくちゃいけないんだって」

「そうだったんだ……………」

二人の間に気まずい雰囲気が流れる。

「……………いつから入院するの？」

「来週から」

「……………いつまで、入院するの？」

「……………それは、分からない。でも、お医者さんが言うには最低でも一年間は入院しないと駄目なんだって」

明久はショックだった。

彼は密かに、彼女と修学旅行で京都を一緒に歩き回ることを楽しみにしていた。

そして修学旅行で、ある思いを彼女に告げようとしていた。

その計画が全て無に帰すことになる。

それだけじゃない、今の今まで彼女がそんなに重たい病であること

を知らなかったことにショックを受けたのである。

「楽しみだったのになあ、修学旅行。でも、しょうがないよね……」
雨はまだ、ざあざあと降り続けている。

「それに、これからは明久君と一緒に学校生活を送れなくなっちゃうんだ。それに退院しても私はまた2年生をやり直さないと行けない。いままでずっと一緒のクラスだったのに、これからはもう一緒になることもない……」

そこまでいうと、彼女は泣き始めた。絶望に打ちひしがれたように彼女はないた。

「なにを言ってるんだ、春香。一年ぐらいたいしたことないじゃないか」

「えっ？」

彼女は どうして そんなことをいうの というような顔で彼の顔をみた。しかし彼は構わずに言葉を発し続けた。

「修学旅行が行けないっていうなら、俺がいつか絶対に連れて行ってやる。お前のお見舞いだって毎週必ずいく。そして、一緒のクラスになれない？それがどうした、そんなの関係ない。だって俺は」

「——春香、お前が好きだからだ」

「え、ほっ、本当に……？」

「もちろん本当だ。それでお前はどんなんだ……？」

「もっ、もちろん好きだよ！明久君を思わなかった日なんてなかった」

「ただだからっ！」

そして、明久は春香に負担が掛からないように軽く抱きしめた。
そして春香も明久を抱きしめ返した。

抱きしめ合っていたのは数秒間で、互いに離れ合った後急に恥ずかしくなり明久は目を反らした。

「春香。これからは俺がクラスで一緒じゃないとか、留年すること
で嘆いたりするんじゃないぞ。俺達はこれからはいつでも一緒にい
るんだから」

「あはははは、明久君、は、恥ずかしいよ。そんなセリフっ」

「ひどっ、俺はなあお前のためを思って」

「うん、分かっているよ」

春香は明久の顔をじっとみた。その表情にもう陰りはなかった。

「私はもう、病気や留年なんかで嘆いたりしない。だってそしたら
明久君が悲しむから。だからもう大丈夫だよ」

「あぁっ……！」

「そして、私の病気が治ったら一緒に修学旅行をやり直そう。私、
ずっと京都を君と一緒に周りたかったんだあ」

「ああ、一緒に行こう。必ず！」

（後書き）

プロットの練習も兼ねて書いたものです。
批評・感想をよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9860n/>

お見舞い

2010年10月9日18時50分発行